

修士論文（要旨）

2013年1月

病院ボランティアへ参加する高齢者の活動の思いに関する研究

指導 芳賀 博 教授

老年学研究科

老年学専攻

211J6007

勝又直

目 次

I. はじめに

1. 研究の背景
2. 先行研究
3. 本研究の目的
4. 本研究の意義

II. 研究方法

(研究対象・調査方法・統合方法)

III. 研究結果

IV. 考察

【文献】

I. 1. 研究の背景

近年、ボランティアの存在が「奉仕者」から「担い手」へ変化している。三木松¹⁾は自発性・主体性・連帯性・社会性・非営利性を基本的性格だとし、大曾根²⁾は「担い手」として地域づくりに貢献するとしている。

2. 先行研究

足立ら⁵⁾は病院ボランティアの促進要因と阻害要因に触れ、小坂¹⁰⁾は病院ボランティア活動の可能性を述べているが、病院ボランティアの生の声が反映された研究ではない。

3. 本研究の目的

本研究において、病院ボランティアへ参加する高齢者の視点からみた、病院ボランティア活動に関する思いを明らかにするとともに、病院における高齢者のボランティア活動の促進要因や阻害要因について検討し、明らかにする事を目的とした。

4. 本研究の意義

病院ボランティアへ参加する高齢者の視点からみた思いと病院ボランティアの促進要因や阻害要因を明らかにする事は、今後の病院ボランティア、病院、その地域の活性化を生む。本研究は病院職員ではなく病院ボランティアへ参加する高齢者の視点で活動に関する思いを概念化しようとしたところに特徴がある。

II. 研究方法

秦野赤十字病院ボランティアグループ 12 名に半構造化インタビューを実施し、KJ 法¹⁵⁾¹⁶⁾¹⁷⁾にてカテゴリライズし統合した。

III. 研究結果

5つの大分類（島）、(I) [活動から得た自身へのきづき] (II) [共に行動する事から得る魅力・絆] (III) [活動を継続する上での戸惑い] (IV) [病院に対する葛藤] (V) [病院ボランティアとしてのモチベーション] へ統合した。これを図解し [病院ボランティアを取巻く「思い」の構造]、病院ボランティアへ参加する地域在住高齢者の活動に関する思いと病院ボランティア活動の促進要因・阻害要因が明らかとなった。

IV. 考察

病院ボランティアへ参加する高齢者は、自己の健康や今後について考え、院内における触れ合いから自身が何を出来るのか、すべきかを考える機会となっている。また患者との触れ合いを通して、人の役に立つ喜びや生きがいを見出しており、その病院ボランティア活動の継続には取巻く家族等周囲の理解も必要である。さらに、良い病院づくりに医療従事者としてではなくボランティアとして仲間と共に参加しているのだという思いを抱き、充実感・満足感を得ている。またボランティア活動に対する考え方や価値観が会員によって違う現状や病院への葛藤も抽出されたが、本当は良い病院にしたいとの思いがあるからこそ会員間や病院に対して戸惑いや葛藤が生じる。さらに、会員間、会員と病院側、それぞれの相互理解を深める事が病院ボランティア活動の阻害要因を軽減し、促進要因を増大すると共に、病院ボランティア、病院、その地域が活性化すると考えた。

【文献】

- 1) 三木松政之、朝倉美江『福祉ボランティア論』有斐園アルマ 2007 第1章6頁
- 2) 大曾根寛『現代の福祉政策』(財)放送大学教育振興会放送大学大学院教材 2010
- 3) 日下菜穂子、篠置昭男「中高年者のボランティア活動参加の意義」
『老年社会科学』第19巻第2号 1998.3
- 4) 日本病院ボランティア協会編『病院ボランティア ～やさしさと心のかたち～』
中央法規出版株式会社 2001
- 5) 足立清史、渡辺善文、高田史子、平野優「病院ボランティアグループに関する全国調査」
九州大学大学院人間環境学府足立研究室編 2003.3
- 6) 足立清史「病院ボランティアコーディネーターのあり方と課題 ～全国調査からの示唆～」
九州大学大学院人間環境学研究院足立研究室編 2003
- 7) 中山博文「急速に普及しつつあるわが国の病院ボランティアの現状」『病院』第57巻4号
1998,4
- 8) 足立清史「病院ボランティアコーディネーターに関する全国調査」九州大学大学院
人間環境学研究院足立研究室編 2003
- 9) 新垣円、齊藤民、高橋都、甲斐一郎「病院ボランティア活動に関するボランティア・
病院職員への意識調査」『病院管理』第55巻 2004.1
- 10) 小坂享子「病院ボランティア活動の今日的意義の検討」『神戸大学大学院人間発達環境学研
究科 研究科紀要』第2巻第2号 2009
- 11) 加藤博史「病院ボランティア活動の参加調整推進と自己評価指標」『福祉教育・ボラン
ティア学習研究年報』vol.2 1997
- 12) 松本みよ子「病院ボランティアの目指すもの」『看護展望』1997.2 vol.22.No.3
- 13) 「秦野赤十字病院ボランティア活動の手引き」秦野赤十字病院ボランティアグループ編 2009
- 14) 萱間真美「質的研究実践ノート ～研究プロセスを進める clue とポイント～」
医学書院 2007
- 15) 川喜田二郎『発想法』中公新書
- 16) 川喜田二郎『続・発想法』中公新書
- 17) 田中博晃「KJ 法入門：質的データ分析法として KJ 法を行う前に」『より良い外国語教育
研究のための方法』外国語教育メディア学会関西支部メソドロジー研究部会報告論集 2010
- 18) 三木松政之、朝倉美江『福祉ボランティア論』有斐園アルマ 2007 第1章19頁
- 19) 前田尚子「友人関係のジェンダー差」『老年社会科学』第26巻第3号 2004.10
- 20) 三木松政之、朝倉美江『福祉ボランティア論』有斐園アルマ 2007 第8章141頁
- 21) 炭谷靖子、宮嶋潔「ボランティア活動を推進するためにボランティアサポーターに出来る
こと ～2年間のサポーター活動の振り返りから～」『共創福祉』2010.第5号第2号 11～